Encore
アンコール

一般社団法人
半導体産業人協会
会報

2026 年 7 月

No. 133

巻頭言

革命を志す漢（おとこ）たちの物語

SSIS 理事・編集委員会委員長　法元　寛



会報誌 Encore の巻頭言の執筆を依頼する時、よく執筆者から何を書けばいいんだ？と問われることがある。私は、「好きなことを書いてください。最近、自分が考えていること、関心を持っていること、何でもいいです。」と答えている。今回も、この原則に従って、現在、自分が最も気にかかっていることについて書きたいと思う。それは、北方謙三氏が書いた「水滸伝」[1]という小説である。

皆さんもご存じの通り、「水滸伝」とは、もともと、「西遊記」、「三国志演義」、「金瓶梅」と並ぶ中国の四大奇書の一つで、北宋の末期、社会が腐敗する中、様々な事情で世間からはじき出された百八人の好漢（英雄）たちが梁山泊（りょうざんぱく）と呼ばれる自然の要塞に集結し、悪徳官吏を打倒し、国を救うことを目指すという物語である。[2]（実は私はこの原典は読んだことがない。）北方謙三は、この小説に独自の解釈と創作を加えて、原典とは全く違う、社会革命を志す漢（おとこ）たちの物語に作り替えたのである。（以下、中国の「水滸伝」を原典と呼び、北方謙三の著作の「水滸伝」を単に水滸伝と呼ぶことにする。）

水滸伝は、1999 年から 2005 年まで約 6 年、小説すばるに連載された全巻 19 巻におよぶ小説である。北方謙三は、さらにこの続編として、楊令伝（全 15 巻）、岳飛伝（全 17 巻）を書き、全部で 51 巻、原稿用紙 25,500 枚に及ぶ大作となった。筆者は 2005 年頃、小説が完結する少し前にこの小説に出会い、ほぼ三か月で（水滸伝を）一気に読破した。つい最近、水滸伝の冒頭の部分がテレビドラマ化され、このテレビドラマを観て、登場人物たちの名前を懐かしみ、昔、この小説を読んで感じた熱い想いが蘇ったのだった。

北方謙三は、学生時代、いわゆる 70 年安保を体験したが、この小説を書いた動機について、“私はこの作品で、革命を志した闘いと、それが潰えていく物語を書いたが、外郭のそれとは別に、かつて抱いた内的衝動を様々に書き込んだと言っていいだろう。“[3]と述べている。

筆者がこの小説にどのように魅了されたのかを述べたいと思う。水滸伝のリーダーは二人いる。雄々しく戦って死んでしまう晁蓋（ちょうがい）と、「替天行道」という革命の精神的なよりどころとなる冊子を書いた宋江（そうこう）の二人である。北方謙三は、それぞれ、キューバ革命のゲバラとカストロをイメージしたと言っている。[3]茫洋としているが、人の心を忖度し、皆を引き付ける魅力がある宋江が組織をまとめるために重要な役割を果たしている。

「替天行道」とは、天に替わって道を行うという意味である。原典ではこの言葉は、彼らの旗印に書かれた文言に過ぎないのだが、北方謙三は、革命に賛同する同志を募るための、精神的なよりどころとなる冊子のタイトルとした。実は、この冊子の内容は水滸伝には全く書かれていないのだが、宋江がこの冊子を書いているシーンが映像に入っている。革命を起こすためには、イデオロギーに基づく国家観を持つ仲間たちを集めることが必要であると北方謙三は考えている。

革命を起こすためには経済基盤が必要となる。北方謙三はこのために塩の道という設定を用いた。中国では古くから鉄と塩を国家が専売とし、管理してきた。梁山泊のメンバーは、国家権力の象徴ともいうべき塩を国内で流通させるネットワークを構築し、革命のための資金源を確保した。梁山泊は、闇塩の流通

網だけでなく、飛脚の情報連絡網を構築したり、戦士の鍛錬や育成、特殊部隊、武器開発部門を作ったりするなど、長期的な政府との戦いにおいて必要となる様々な組織を作っている。

宋の政府側にも腐敗した官僚機構を改革しようとする動きがあり、政府を倒そうとする梁山泊に対抗しようとする。北方謙三は、この梁山泊に対抗しようとする頭脳集団として青蓮寺という諜報機関を創作した。この青蓮寺のリーダーが李富(りふ)である。この李富という人物は、常に冷徹な謀略家であり、梁山泊も何度も痛い目に合う。“政治闘争においては、正義が悪を討つということはほとんどなく、相対的な正義同士の戦いである。”[3]と北方謙三も言っているが、青蓮寺と梁山泊のいわゆるスパイ戦は見ごたえがある。また宋の軍の中に童貫(どうかん)という優れた将軍がいる。童貫は宦官だが精強な軍を創り、最後は梁山泊軍を打ち破ってしまう。(童貫は、水滸伝の次の楊令伝で楊令に負けることになる。)“梁山泊軍の敵側の人物にも確かな存在感を与えたいとの思いから、原典にはない、あるいは、原典とはまったく異なる人格を与えた登場人物がたくさん出てきます”[3]とあるように、水滸伝の登場人物たちは敵味方双方に魅力的な人物が登場し、死んでいく。しかし、読者の心の中に生き続けるのである。

水滸伝の原典には女性は全く登場しないが、水滸伝には様々な魅力的な女性が登場する。北方謙三は、“女に寄せる男の想いといったものを排除してしまったら、小説はやせ細ったものしかならない”[3]として、例えば、冒頭に登場する林冲(りんちゅう)という男は、もとは禁軍(政府の近衛兵)の槍術師範だったが、梁山泊に身を投じ、その妻が獄中で悲惨な最期を迎えたことを知り、その時初めて自分が妻を愛していたことに気が付く。愛する妻を救えなかった事がその後ずっと林冲の心の傷となる。また、馬桂(ばけい)という女性は、宋江の間者であったが、青蓮寺の李富の謀略によって、娘の閻婆惜(えんばしゃく)を宋江に殺されたと信じ、梁山泊に対するスパイとなるのだが、彼女を李富が愛するようになる。他にも様々な男女の人間関係が展開し、面白い。

北方謙三は、“人間が国家を作り組織を作る。それが成熟し、やがて劣化していくという過程で、人間の欲望や打算といったものが介在して腐敗を生み出していくのではないか。そう考えてみると、人間の本性のありようとしても、社会のありようとしても、腐敗というのは逃れがたくあるのではないかと思ったのです。そしてその腐敗と闘うという行為は、新しい国家を作り出すことにつながっていく。”と言っている。[3]北方謙三のこの言葉は、宋の時代だけでなく、第二次世界大戦後八十年ほどを経た現在の国際社会においても、当てはまることかもしれない。

筆者は1980年代の我が国の半導体の隆盛期に半導体産業界に就業し、その後、失われた30年と呼ばれる半導体の凋落を体験した。一エンジニアとして、自分に託された日々の技術開発の業務をしっかりと果してきたつもりであったが、いつの間にか、最先端への投資が縮小して、日本の半導体シェアが低下していった。企業や自分たちに腐敗が生じたとは思わないが、従来と同じようなやり方でやっていけるという“慣れ”に甘え、時代の変化に対応して自己を変革しようとすることを怠っていたのではないかと、今でも忸怩たる気持ちを覚えることがある。北方謙三の水滸伝を読んで熱い気持ちが胸に沸き起こるのは、そのような“悔い”が心にまだ残っているからであろうと思う。

産業を興すということは、革命を起こすことと同じではなかろうか、時代の変化を読み、必要な手段を確保し、できることをすべてやる、そういった気概が必要だったのではなかったかと思うのである。すでに引退した私が説教じみたことを言う気はない。新しい時代を切り拓く後輩たちの頑張りを応援したいと思う。

参考文献
1) 水滸伝 北方謙三著 2006年 集英社
2) Wikipedia「水滸伝」
3) 北方謙三の「水滸伝」ノート 北方謙三著
NHK出版

CONTENTS

・巻頭言	革命を志す漢(おとこ)たちの物語	法元 寛	1頁
・寄稿文	QFN普及と標準化	福田 敏行	3頁
・報告	講演企画委員会報告	有門 経敏、近藤 誠一	7頁
・市場分析	半導体製造プロセス開発へのAIの応用	有門 経敏	10頁
・文化活動	SSIS第20回多摩会	川本 佳史	15頁
・文化活動	第22回YMK会講演会	日高 義朝	19頁
・追悼	野澤滋為さんを偲ぶ	編集委員会	24頁
・協会だより		SSIS事務局	28頁